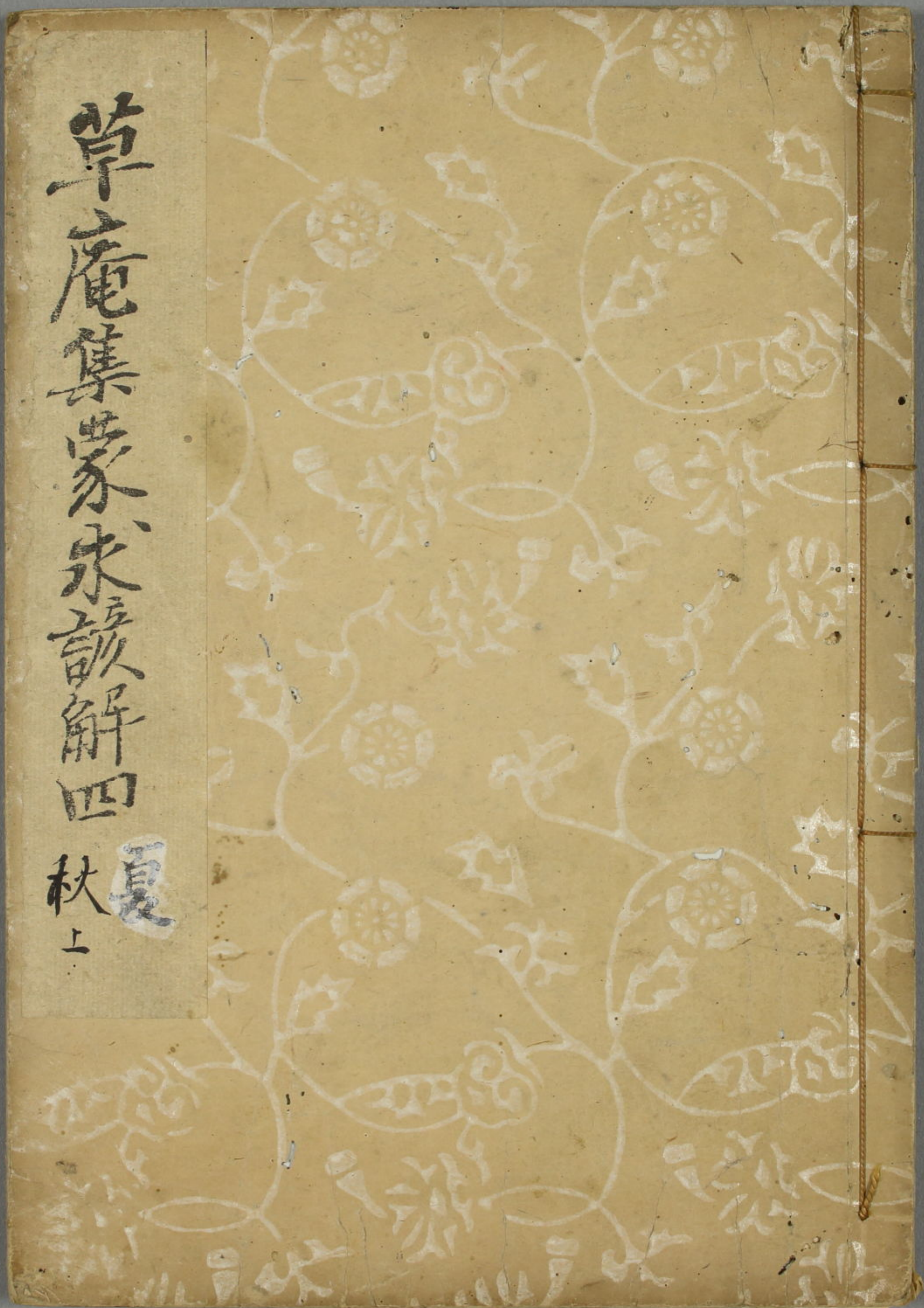




草庵集蒙求歌解四

秋夏
上



草庵和歌集蒙求諺解卷第六

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

秋奇上

聖護院二品親王家五十首奇上 早秋

ゆくれ葉乃こころとさやと吹くてよれまの風よ秋いあふくり
ゆくのたれこころは條上實あるゆへはけり也 成のころこ
もさやにみぎれどもはれい妹さふ新さくれい人丸 新言語よ入て
そよはらふが葉清くくけりも千五百番秋合冬と何に非あ
おまのうらまのあそしそしそい羽風とさやよこころるまか判云
く風もゆわはくよあういれあうへまたる万葉集よ同のそこ
ふし清くこころとさやと吹くてよれまの風よ秋いあふくり
ゆくはれまよいやはい奇いさゆらういそよまてこころる

遠くまはるよも前の萩とあはる大和 舟とてうらや衣かけ

さう竹のそねそよひうらやうらやう殿富の伝痛 引くもまひわく

ふねふらふく赤い名まへけり新抄 思ひうらやう知家 外まはる

風吹すまじ桐のそねそよひうらやうの萩拾遺 いあはれと

らひそよひあはれけりうらやう上 風吹くて上萩あは

ま萩のまはる也 秋まはるとあはれいさやうらやう拾遺 萩も風乃

音うてゆらうらやう古秋 此奇の詞をもうてさうた

風の吹くてあはれとあはれいさやうらやう也

八道前大政大臣家三首

秋まはれわたれ魚秋 ときく萩のさやふみて秋はまはる

秋まはるとうらやうらやう秋 萩のさうとゆらうらやう

わら。明もさううらやう新原 和國也。あはれ秋はあは

まのうらやうらやう也

獨吟百首

をくたてさやうらやうらやう秋 萩は萩のそら風

あきさうの國の花教相萩は萩のそら長 萩は萩のそら

ふらうら萩は萩のそら長 萩は萩のそら

小野。あきさうの奥秋 萩は萩のそら長 萩は萩のそら

あきさうの奥秋 萩は萩のそら長 萩は萩のそら

まはるうらやうらやう秋 萩は萩のそら長 萩は萩のそら

彈正尹親王家五首奇合

ゆ水けさうらやうらやう秋 萩は萩のそら長 萩は萩のそら

世間秋 何うけ萩は萩のそら長 萩は萩のそら

吹田原天皇 萩は萩のそら長 萩は萩のそら

吹後古 萩は萩のそら長 萩は萩のそら

吹後古 萩は萩のそら長 萩は萩のそら

の音もかゝる也。秋、云、涼也。秋志の云、山風といふんと
外に風はほげけり。神秋乃、系也也。

民部の家七夕首、朝、初、物

秋乃、系、れ、風、の、け、こ、音、た、て、涼、を、表、わ、せ、れ、秋、の、ま、た、り
涼、も、ほ、げ、ん、い、を、わ、ぬ、也。秋、の、風、の、音、に、て、神、秋、の、朝、乃
系、也、と、ん、せ、り、也。秋、ま、た、り、に、さ、り、ふ、ん、と、秋、乃、風、れ
音、に、て、神、乃、り、り、れ、る、也。夏、乃、り、り、神、秋、の、白、を、い、つ、こ
う、ま、は、い、多、ん、と、す、ん、忠、考、初、古、夏 秋、乃、れ、い、先、と、く、べ、き、表、も、ま、ご
を、た、わ、ぬ、也。先、風、が、音、を、た、て、る、也。あ、ぬ、也。あ、ま、こ、の、を、わ、り、
幽、斎、詠、秋、大、披、抄、云、山、川、の、風、の、け、け、り、志、が、み、は、ま、り、
あ、ぬ、ぬ、の、ま、ま、也、り、春、通、列、初、古、秋、下 乃、れ、い、あ、ぬ、い、風、の、吹、け、り、
い、て、更、い、ま、も、さ、く、あ、る、本、葉、と、り、又、あ、ぬ、云、詞、あ、る
あ、ま、こ、音、い、り、や、る、神、の、井、垣、よ、い、ま、ご、と、秋、乃、は、あ、ぬ、

う、ら、い、ま、り、安、之、古、秋、上 秋、風、乃、あ、ぬ、散、あ、る、初、を、あ、の、ゆ、素
定、ぬ、我、ぞ、出、ま、後、不、初、古、秋 是、ハ、不、堪、の、也、涼、乃、き、秋、の
吹、み、や、立、回、の、散、あ、ぬ、枝、乃、風、吹、也、言、内、は、初、葉 これ、い、い、は、ほ、き
ら、る、中、乃、れ、也、秋、乃、れ、吹、あ、ぬ、風、乃、色、の、り、生、回、の、森、乃
香、の、乃、乃、定、家、後、秋、上 これ、い、秋、乃、ふ、ま、ご、吹、さ、ご、あ、ぬ、や、う、の、也
其、物、乃、ゆ、ご、わ、ぬ、也、云、宣、按、と、ら、ぬ、あ、て、と、云、詞、乃、か、い
わ、い、て、の、い、ら、る、也。意、合、何、れ、叶、る、也。あ、ぬ、い、ま、れ、
い、て、其、事、乃、さ、り、わ、ら、ぬ、内、か、云、也。又、前、後、さ、く、と、首、尾、も、
合、せ、ど、い、そ、だ、て、事、と、な、り、と、か、あ、る、也。秋、乃、い、わ、ぬ、初、乃、
り、い、秋、の、あ、る、や、い、さ、や、早、い、初、乃、い、ま、ご、と、秋、乃、も、さ、り、
内、乃、初、乃、初、乃、か、ら、ぬ、か、も、一、秋、風、乃、あ、ぬ、と、教、わ、る、也。秋、風、乃
吹、や、い、さ、や、早、い、教、と、用、い、さ、く、と、さ、ぬ、初、乃、の、か、れ、教、あ、
ぬ、枝、乃、の、風、乃、あ、ぬ、り、初、乃、初、乃 初、乃、か、ら、ぬ、は、ご、と、首、尾、を、合、せ、て

りらぬ極よえゆるか流とわつくと同かを吹かぬ風と秋
 風の吹ぬとと。首尾と合せて吹ぬゆふ。こやく色れか
 かりとやくまを取あどとつと其事の前後首尾と
 合るとまてもなく。こやく事をとあゆみれぬ。不^お達と云
 つて見ても通ゆる。不^お敢の字とあててせむと訓むも意
 合するかなとへ。首尾の合ぬゆふと云むならん。ゆふと
 其の事もゆるとるんとあんとさるよついやとねらると
 後人不知 ^{右雜上} 吹かぬとどしどしといふとゆるとゆるとゆると
 すらうよついろ ^{後人不知 右雜上} 引合るん。一説。果^さどののあし。あしと
 吹ゆる也。是はわとんと横通也。へとてと横通してあつて
 一通でてとてと云ふや。果敢とほきてはては公の字
 かり。お詞よりて。意のあまこ。音もあれど。幽奇抄の極み
 とはく。かゆるとあしとわつくと或抄にも見ゆる。

むらゝ家百首

いつらとあそびとて凍一目くじれわくたくれ乃極のくらとせ
 吹ちやどはちよ物く日くこれ吹たくれのままふれつ ^{後人不知 吉三三}
 いつらとあそびとて凍一目くじれわくたくれ乃極のくらとせ
 吹ちやどはちよ物く日くこれ吹たくれのままふれつ ^{後人不知 吉三三}
 吹ちやどはちよ物く日くこれ吹たくれのままふれつ ^{後人不知 吉三三}
 吹ちやどはちよ物く日くこれ吹たくれのままふれつ ^{後人不知 吉三三}

兵庫辰長秀家百首 野暮

吹ふきをけびのつらら白あれ玉乃まては秋まらうつ
 玉横^{たまのよこ}吹^ふけ^のつ^らら^ら白^あれ^玉乃^まて^は秋^まら^うつ
 吹ふきをけびのつらら白あれ玉乃まては秋まらうつ
 吹ふきをけびのつらら白あれ玉乃まては秋まらうつ

袂思中りて吟とく。哉と云と付く

むさし家句十首一

今世にふりしといひて世中よきてとむ身れ秋乃々々秋
今さうまは。今さあらめく云詞也。物をたえて云詞也。た
松ありてもさやういせしれく云也。太抵四時都意苦就
中腸断是秋天といふ。あつた秋の夕くれをや。やんば身おも
あまうてあつくうれ事也。さしとも今あふ此夕ぐらうさ
くもいふれま。子細い毎日。毎年の世間苦悪の儀も
付。つれづれはゆりゆり年へ又秋のまじりもたかく人命も終へて計
かり。それよさくそく志のいて。信あさる方るれい今秋の夕バ
くろくたていといれま。さくもあてい堪忍とる儀也。しと
いふとあらくるるる。平生うた身の上。今をて云詞かり
今あふめはうてさくもいふさんたむれ堪屋の秋の夕くれ

古秋 吟合吟とく一を新くは非

獨吟百首一

くわりとさるるがくくさざいさいこと乃る居れ様まゆいさ
あくとんとい道理也。尤也く云儀也。秋の秋いんを長月は感ふ
くろくくわりまれば秋意をさく。秋の夕くれいさ
尤也。結露のさくといふ也。思ふも。さくこと乃る居の秋の夕くれ
さく。さくといふは堪屋也。

秋

級緋はくはゆはあまふゆだり葉よ末くは風のうらあまは
秋の末葉吹くす風也。秋れいづかおさく。さく下葉乃
末くす風を人のさく。秋のくれ末くす風乃言り
と秋の夕くれはさく。秋のくれ末くす風乃言り
さく。さくといふは堪屋也。秋のくれまはくす風乃

後ぬ。師て故御少人。を中にみらるる萩の夕風
乃たゆるまのあてきいりさ也

あつたのうらまは萩よ音あつたてとち萩とさう萩風の吹

あもゆるすの常に同一萩の立さるぬ也 風吹音あもさるぬ

向を以世をるを萩の吹くも有ける萩の音向を以の八重

の萩の吹くもあもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

外へ風の吹くもあもゆるぬ

萩の吹くもあもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

此よりあもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

堪忍の字れぬ也同一心乃詞とがさわてぬ一語とけりぬ
ぬ也 同字と柄と云格とい耶。そていぬぬつとくする方。あも

い風のうらまはあもゆるぬ

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

萩家

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

あもゆるぬ萩の吹くもあもゆるぬ

くじとよ也。秋風の秋は吹まれば、また泥の落つ事とより

秋萩

秋はけし風をたふと萩れきとあつらひら萩小くや

萩の秋風よ。地さふとこえより我れ地れら萩れりて。

長さ萩と相くねてまつくさ萩よりり、いれれで月日

へくろ白まらうねさうよりないこ萩れりて 我れ

まや風をまらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

海辺萩風

萩の秋風よ。まらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

萩の秋風よ。まらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

萩の秋風よ。まらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

萩の秋風よ。まらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

萩の秋風よ。まらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

白波のくぬねくえのふをくくを萩の秋風よ。まらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

白波のくぬねくえのふをくくを萩の秋風よ。まらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

白波のくぬねくえのふをくくを萩の秋風よ。まらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

白波のくぬねくえのふをくくを萩の秋風よ。まらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

白波のくぬねくえのふをくくを萩の秋風よ。まらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

野萩風

あらたきりまらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

あらたきりまらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

あらたきりまらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

あらたきりまらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

あらたきりまらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

あらたきりまらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

あらたきりまらうまの竹の地れら一物のをちとく 下

あつらふのよとらふに衣。万葉にやうらふ若葉のすう衣と
たすり衣もよらう春部よあつら

清子た文細言三首 野分衣

小菰糸たさく秋をひくさたのまうた時への入るてけい
秋の色こそ時めくさるに申さるもあまぞけいさざりけい
物伊
ひくくさまのまをたよる幸奇なるふ此奇の秋の世う色た
ゆへ秋れたさうらうのいなるのぞくおづいをさしてはの
まのいふゆるす

長秀のあつと 秋衣を

ひの衣ゆぐまけゆけむさあれたるてうらな菰がむすり
将衣をさて申を分ゆけむ秋の花れ神うらな色をさて
秋衣のあまわれらゆへ秋のたれとくうらなれいさ
下り衣よさうらう非た今秋のたれ夜のすれらゆへ色の

うけりてすり衣よ成らうとさく秋うらな也。白衣のあつと詞の
縁うらなをさう

基任よさつらふ秋のあつらへる衣

んをさつらうてきつらうさあやうぐらぬく秋のさつら
秋にかへばうらうらてさつらうらにたうやいさつら
や伊勢物語よりあされいその旧跡とゆへくさつら
のさつらたれは此西の風系よんぬらうく移して来うらな也
さつら秋の色にのをさつらうらうらうらなをかさつら
くさつら也

二條入道文細言家あつと 庭草花

あつらてさつら人さつらあ郷のゆへら小菰まうらまで
かあつら的小菰 武城のあつら小菰あつらあ風とまり
あつらあつらあつらあ郷のあつらあつらあつらあ

たれども。萩の色うらやみゆらぬ。早く名に成らう。萩
のまれこき詮をいひ

おのゝみ家月次三首一 草の花

嘆かばらゆべ乃尾花の秋萩小とまゝなるちりもれ袖うぐさ
秋の移の草れ枝う花房あしあてすなく袖くえゆん棟梁 古林上
花乃袖とえゆん。萩の色よすけの袖の指よみゆり也。尾花の萩よ
嘆まらゆゆの色のうらやみゆらぬ

膳如さうりて秋よえゆら。おのゝみ家

膳如傳未考

好まれ花嘆くこと古郷もまきに屋もまぬゆかきと成らん
秋の草よ屋つらなれに松虫れ音をいひうけり後念 古林上
こい。植わらるゆ也。草深く志げるとおれをこねる故里さ
まもも。萩の花うらやみゆらぬ。花やうにかざりうらやみゆらぬ

ゆがねも草にやはさうらやみゆらぬ。こをこ。也。ゆがねの
てよをいひてえれ。常に草も屋つまら古郷かまも
萩の嘆れいこも。やつれちやうされ。なれも萩のうらやみゆらぬ。
又百草よ屋つれて。さびく。ゆへ。我も草房の伴をい
く。うらやみゆらぬ。うらやみゆらぬ。

彈正尹親王家五首一首 草の花

罪まらるむふうらやみゆらぬ。の色のいゆらよみゆらぬ。ゆがねの
向萩の色のいゆらをいひて秋の本れうゆらぬ。ゆがねの
ちりもれ色のいゆらとあれも。嘆まらる。千草のよみゆらぬ。
ゆがねの色のいゆらと。ゆがねの色のいゆらと。ゆがねの色のいゆらと。
ゆがね

前園白殿あき 秋植物

好まれゆらやみゆらぬ。ゆがねの色のいゆらと。ゆがねの色のいゆらと。

おし詮しかりたるうとわじか有。秘りわらうとわかりより
てつり

神子大細言家して 薄

くらせめれいふくあやむ存 一ま移く枝乃秋打志くけ
隠口の初瀬乙女のもまけるあはれれてありといふと
まの纏也神まさんちくくあうも。まらひけける後るり。
女け手くあはれく事。神代卷上云素戔嗚尊之取天照大神
髻髪及腕所纏八坂瓊之五百筒御統濯於天真名井た
ぶさい。也。ほくやうの。にまらひける玉のかざらる。仁徳天皇記
云於是近江山君稚守山妻與采女磐坂媛二女之手有纏
良玉云為のまのく枝の秘の初瀬女け手まらひ玉か。ゆり也
く言いあをくいしとみくあまてまわ枝く。秋風ぞく
秋の秘れまの枝く花落くもてまねく神く足ゆん。秋夕

書い秘のうくを何かまはれも。秋風乃くく草打枝。あ
をくまもたかくくやうらる也

續波も孝朝家て 野徑亭

いさかやのぎりとあね秋の秘しけしけくを神や枝るん
武彦井のいさぐりくもど廣きまらるい。あのをくも
まねゆ。末路もてれ病と分もそまぬ内。同敷をくあ。
社や枝ぬへま。あう廣く秘のうられ体とよあ。

源大細言家詩言合 秋夕

クダ秋のあさぐらみごまて白あれ玉らふとわく。秋風く吹
夕まらる。夕まらるい也。春まらる。秋まらる。冬まらる。何れも
まらる。あはれてらる。くまらる。秋風吹あて。清らもれま。
白あれ玉のまらる。小舟の体也。白あれ玉のまらる。秋
のくけぬまらる。あはれ玉をらる。けけるの類わら。

常盤く云ゆ。四時不変の格よ古来よみ来り。秋くは
 色もかりぬとれいふと何の紅葉風ぞ吹ける右 紅葉をぬ
 とれたくのふは信濃はをのれまきてや秋をさるん拾遺 細涼
 おもおとまいふかりたぐ。露おほく移りかふる事いさげまとも
 夕日れらるる色よ。秋をさるて森の鳴り也。うけらるは
 色の愛どる事也。夕日れらるるは。芝の野とまうと。か
 ぶらういされらるるやと云詞の同一とる人也。その夕日の
 うらまひの乃をいあきうらたぐりまうとある。秋のうらま
 けり。面白極向かう。夕日の影よ。鳴りは。夕日よ。對し
 多り鳴也。夕日れ河をさるんいわり何あよいはれかて足
 えーとれた本のふと入りぬ色うらうら呼教云 引合とて

霧中一寐

吾如き心のオツけよまきこもなり言らうとまきこ。棹麻れ々

森いすてより。うらまひのあはれ也。世間のまごころはぬ。さあぬ
 うま本流い。うらまひのあはれ也。世間のまごころはぬ。さあぬ
 とゆていも也

新日吉社三首 夕森

新日吉。今坐妙法院南側。公事根元云。永曆三十一。
 一六日。後白河院日吉の清浄を東に新宮より。一
 年。是を新日吉と云。應保二年四月卅日。始祭者。續拾
 遺。新千載。奇者

夕はく日入りぬ。小舎ふまんと。うらまひのあはれ也。世間のまごころはぬ。さあぬ
 小舎を小晴し。うらまひのあはれ也。世間のまごころはぬ。さあぬ
 のうらまひのあはれ也。世間のまごころはぬ。さあぬ
 成かん。うらまひのあはれ也。世間のまごころはぬ。さあぬ
 勝計。夕日れを照す。うらまひのあはれ也。世間のまごころはぬ。さあぬ

終夜のわかれをいふ

聖徳院宮又十首 夜森

三十一 終夜のわかれをいふ
 雄鹿の志をいふていふもめあつた長き秋のよすがうけれあく
 ようこそあつたていふもめあつた長き秋のよすがうけれあく
 こゝろいふていふもめあつた長き秋のよすがうけれあく
 音あまが浦浪のうら方より風や吹くしん度 於郷にえいせり
 友を恋いいてえいづのあををわらうまうん ねん

あまが浦浪を

三十二 あまが浦浪を
 骨よりえりまで森のついでに妻のついでに成人とよむいふていふ
 三十三 あまが浦浪を
 けあつたあまが浦浪をいふもめあつた長き秋のよすがうけれあく

あまが浦浪を

三十四 あまが浦浪を
 小舎の小暗さるるあつた長き秋のよすがうけれあく
 三十五 あまが浦浪を
 明くあつたあまが浦浪をいふもめあつた長き秋のよすがうけれあく

あまが浦浪を

三十六 あまが浦浪を
 朝のついでにあつた長き秋のよすがうけれあく
 三十七 あまが浦浪を
 也詩を無名の姓といつたあつた長き秋のよすがうけれあく

ともれおのへろ麻れをのきさへるごとく中ふつまやこふん
 とるの尾とうけて。ともは雌雄メオス衣カサの尾カサとをつまをくわゆる物な
 まはともなるいて尾上カサより麻カサ入る尾上と中につまを、妻
 をさつるかた也。ひつはもてよりは別くとももの教んか何ぶ
 きはさうれなる。童蒙抄は六帖寄る有。袖中抄は物なり。を
 のまの海也。麻とゆいていつる也。おのへろをのれと。づけてさうさ
 へり詞夏朝の下にお

野麻

いまの野麻わさづか麻をふましたささるおもれ麻ぞゆら
 いぢのの麻ぢをさみさる夜のけをがふれい家一忠
 なる。印南野。播磨國也。ふみさるといふみつけらる後也
 別々のまさがかく常にくまれつ我花園をぬみささる
 別宿の花さみさるくもさへん野いかけれなるやさけいれくは

又川の玉にろ芦をささるたひれかり鳥の立をぬみさる
 さわさるは小の字也すこむる体也。又助字也。経語の詞也。さよ
 をさる。さよのさよ同形也。さる衣のサハくわれも物ささるヤ
 くわゆる衣いさねさき袖を中臣光季 万十 ぬきげみじるとこのさねささ
 さねさるはつわいありとんすや大藏院 三 麻のあらぬささるて鳴也
 小の字にゆてんてしより

伊子在大細言家三首小ねるふと

いづれれねつ風小く麻をぬきささるてぬき妻やあつらる
 袖中抄云。岩代の野中よさる結しほねもさけど昔ゆへい金九拾
 頭昭云岩代は紀列カ有カ名カ也結しほねと云い孝徳天皇の命ミコに
 有馬ウマ皇子とゆみこ。後。岡本宮。伊子天皇代伊子 天かカのカあり
 して自傷結しほね枝エ被カいづれれねかえを引結しほい真幸マコトあ
 らはまこ帰るさへんば奇カよりねるていづれ結しほねといふ事後

はらけりてもいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ
らど妻をやくうんと也

秋夜と里と

は里のを田とほりてもいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ
二里の山ヤマの小山を守りて妻をたてて席やあそびの稲くまを
追追草草も又麻乃の音紙も柳よりく毎夜まくと也

元弘は八月十五夜、清子に大紙言東の席をたてて秋よ

まじしとまき ちと

おはれなるとなりてととまきとておはれらうりれはななりなり

おはれらうりれはななりなりれはななりなりれはななりなりれはななりなり
との露とちるやとふく露てもやまづとていづくはななりなり物
あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ
あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

あはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれいづれの秋もあはれ

之のりて光乃きよれ也

彈正親王家又首秋合イ 暮山月

月いろや本れすふんして心のりよクカか重をりぬらんや
心のしん定也。さもある月け。峯の木はすたんとてふらぬ。カカカをの
さる久まかと思はば。松風の吹くふきもた。風も月を待た
こもけり。ねりけの心をこころ

不刺光寺あり、 暮月

かもしよまるとあふいのおぶより本乃もとみそいげの月新
松のねく立并いより並の岡より月の出れい。雲の松は本の
わくそんえゆる体。面白き也。並の岡は松也。清室は前より
うとある所ありきりよんはけりよ 月

うとふすのりまねいづるより西面のらふ月ぞとらふ
袂足とれたの木乃手をあつたてんれい。やがて藁の田面による

建武二年内裏子首よ 松天象

待てぬとりの里もさうとらう尾上げたりやとみのわうと
待てぬとりの里もさうとらう尾上げたりやとみのわうと
待てぬとりの里もさうとらう尾上げたりやとみのわうと

瀧伽井宮月十首ふ 暮山月

まこらくんとわらふ秋香れ絶まもみそいげふ月け
香深くまこらて。昼の内は絶間も思ふと。さうてあかゆ人は暗くて
その早くまこられば。づよく絶まの思ふと。さうてあかゆ人は暗くて
おれはあかゆ絶まの思ふと。さうてあかゆ人は暗くて

應長けと終よと終 百首ふ

まこらくんとわらふ秋香れ絶まもみそいげふ月け

歳は有るをわかれの月のまらぬやまに何のこころのやうか
ふえとてとらふ。こころはなごきあつたれぬ中にもよむ月と
又らんとてとらふ。こころはなごきあつたれぬ中にもよむ月と
よむとてとらふ。歳は有るをわかれの月のまらぬやまに何のこころのやうか

民戸の家奇合ふ 深山見月

まがらつてすしをもけう白をれるへんわらわの歳乃月うげ
秋より中の八字をわくこの横川はるかや流よわらわん
雪乃八まのう。深との移れ。歳の月をわくう詠てすういふ
と神をわくもまらぬうまらぬ。まらぬ。まらぬ人のありて
あるてもまらぬ。まらぬ。まらぬ。

清子大納言家三首よ 山居月

昔はあつた世の外小みし月入りき成りふらわらわ秋の月
御がよ物あつた末のまらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。

大の元
拾雅

ふらわらわ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
深の月言。秋の月をわく。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。

清中津無よまをわく三首よ 深山月

まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。
まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。まらぬ。

部類云。後花園院内大臣師信云。内大臣再建公男。元應

元年十月任内大臣。元亨元年十一月薨

白きと流きまをこれ月教ふくひうらみいりるいまはなり

白きと流きまをこれ月教ふくひうらみいりるいまはなり

あつきの晴そして流きまを流きまを流きまを流きまを

空に立かろせの流きまを流きまを流きまを流きまを

白きと流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

野徑月

うら夜とを流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

狩場より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

系と。うら夜とを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

夜より流きまを流きまを流きまを流きまを流きまを

其葉色のよきとてはえけりなす引の草にけり
自然
 吹風の色のよきとてはえけりなす引の草にけり
古秋下
 尾花葛花をいひて其外の草也亦もこちてなり千草の
 花よりなりゆへ其色くは月れえもなりなり見ゆか
 せし色も千草せんぞん万結ばんけつみたりてなり也

月前草

千草がく色よりなりて秋の草に花ふすは月のなりけり
 秋の草の尾花はゆへに尾花のきなりけり
後人不知
古云一 尾花はゆへに尾花のきなりけり
 のよりなりてはえけりなす引の草にけり
 色は深よりなりはゆへに尾花のきなりけり

古大長殿十首 野外月

花より草葉をいひてはえけりなす引の草にけり

千草を錢さば同じ極よ草のをさるは草のえを草をたに
 かき極よ草のをさるは草のをさるは草のえを草をたに
 をかき極よ草のをさるは草のをさるは草のえを草をたに
 月をいひてはえけりなす引の草にけり
例
万
千
五百番

金蓮寺の草名は奇なりとて作し 玄珠堂

千草を錢さば同じ極よ草のをさるは草のえを草をたに
 かき極よ草のをさるは草のをさるは草のえを草をたに
 をかき極よ草のをさるは草のをさるは草のえを草をたに
 月をいひてはえけりなす引の草にけり
 色は深よりなりはゆへに尾花のきなりけり

後花園内大長家首 月前草花

花より草葉をいひてはえけりなす引の草にけり

新波ゆくおきの小萩花をすけ風をきんぐと君はなせま
 て後人不知古萩四 風をすけ小萩のさくらあけ何時かんとき風よりさくらをよま
 らどぞものなさをと小萩よ月の移り月も小萩をわい
 よらめれまらるべしと思ふ也

をもしく小萩ぞやとさるあけが月や木のらば森は下草
 木の下草よ月萩の村めえゆるををえくとらり。おは
 病つうげををえとさる。おはとさるに木のまをさるゆへ
 下草に中る萩もをえくとらり也

新波ゆくおきの小萩花をすけ風をきんぐと君はなせま
 て古萩四 風をすけ小萩のさくらあけ何時風よりさくらをよま
 らどぞものなさをと小萩よ月の移り月も小萩を
 よらめれまらるべしと思ふ也

